

# 迫田遺跡出土の刻目突帯をもつ大洞系土器

西牟田 瑛子

## はじめに

縄文時代後期終末から晩期後葉（弥生早期）には、西日本各地において、東北地方に系譜を求められる東日本系土器が存在する。特に、縄文時代晩期後葉に位置付けられる大洞 A1 式期には、その分布域が奄美・沖縄地方にまで広がることが明らかにされている（設楽 2018）。

指宿市においては、平成 26 年度の保育園舎新築工事に伴う迫田遺跡の確認調査において、市内で初めて 2 点の X 字状の文様を持つ東日本系土器が出土し、大洞系土器として報告を行った<sup>1)</sup>（惠島・鎌田編 2014）。うち 1 点については、刻目突帯を有する大洞系土器であり、鹿児島県内でも類例のない資料である。しかしながら、報告書内では本資料について十分に検討することができなかった。そこで今回は、迫田遺跡出土の大洞系土器の編年的な位置付けとその意義について、若干の考察を試みたい。

## 1. 資料の観察結果（図 1）

迫田遺跡は、山裾に近い緩やかに傾斜する海拔 20m 前後の火山性扇状地上に所在する。大洞系土器が出土したのは第 9 層の包含層中であり、黒川式新段階、干河原段階を中心に、刻目突帯文土器が伴出している。本資料は、台付鉢の脚部と想定される器形を呈する。中空の脚部はハの字状にゆるやかに外反しながら開き、端部はやや丸みをもつ。胴部との境には刻目突帯を 1 条巡らせる。刻目はヘラ状工具により施されている。脚部には、成形後ある程度乾燥した段階で、文様が削り込まれており、三角形状の割込みにより X 字状をなす。わずかに残る鉢部の内面にはススの付着が認められる。また、胎土の色調や混和材などの特徴は、伴出する在地土器と同様である。

## 2. 考察

### （1）編年的位置付けについて

型式学的に検討を行い、本資料の編年的位置付けについて考えてみたい。刻目突帯文土器の編年については、精製器種である浅鉢を軸として九州地方における広域編年を構築した、宮地聰一郎氏の編年（宮地 2008），大洞式土器については藤沼邦彦、関根達人による編年（藤沼・関根 2008）を用いる。

まず、本資料の器形は、刻目突帯文と大洞式どちらの系統に由来するのか判断が難しい。刻目突帯文土器に少量存在する高杯は、全体の器壁が薄く長い形態の脚部を有し、本資料との形態的な類似度は低

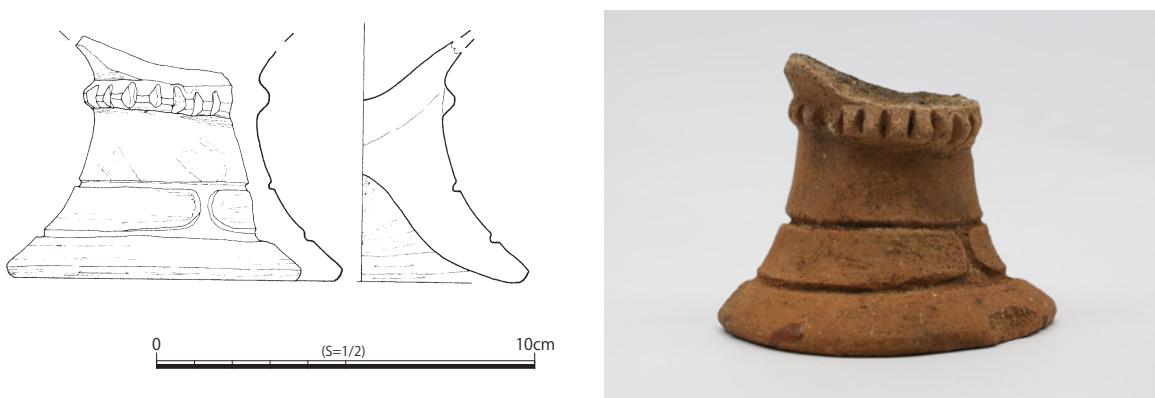


図 1 迫田遺跡出土の刻目突帯をもつ大洞系土器

い。大洞式土器の台付浅鉢は裾に向かってハの字状に開くものの、いずれも、脚部は器壁が薄く、本資料のように脚部内側を厚く成形することはない。これは、本資料の器形がいずれの系統に由来するにしても、土器の作り手が成形方法までは知らず、外観を模倣した可能性を示唆している。なお、刻目突帯文土器に浅鉢に脚部をもつ高杯が出現するのは、宮地編年 II a 期（夜臼 I 式、大洞 C2 式後半併行期）以降であり（宮地 2008），大洞式の台付浅鉢が急増するのは大洞 A2 式期である（藤沼・関根 2008）。

次に、本資料の突帯の刻目に注目すると、ヘラ状工具による小ぶりで端整なつくりであり、深鉢に施される突帯の特徴と照らし合わせると、宮地編年の II a 期～ II b 期古段階（夜臼 II 式、大洞 A1 式併行期）に該当する。以上の点から、本資料の編年的位置づけは、宮地編年 II 期（大洞 C2 式後半～大洞 A1 式併行期）段階と考えてよいだろう。

## （2）迫田遺跡出土の刻目突帯をもつ大洞系土器の意義

迫田遺跡出土の大洞系土器が、宮地編年 II 期、大洞 C2 式後半から大洞 A1 式段階にあたる在地製作品であることを述べた。当該時期は、北部九州において水田稻作が開始されて弥生早期を迎え、社会が大きく変動する時期に相当する。当該期の東日本系土器を詳細に分析した設楽博己と小林青樹は、大洞 C2 式後半から大洞 A1 式段階に東日本系土器の西漸が勃発し、分布域を南西諸島まで大きく広げたこと、板付 I 式の壺の文様として、亀ヶ岡系土器の文様が取り込まれた可能性があり、西北部九州の弥生土器成立には東日本系土器の土器が深く関与していることを明らかにした。そしてこの現象を、東北地方中・北部が農耕文化への胎動に触発した結果とみなした（設楽・小林 2007）。さらに設楽は、南西諸島出土の大洞系土器がほぼ大洞 A1 式段階に限られていること、そして沖縄県域まで及ぶ大洞系土器の拡散は、水田稻作と直接関係しないまでも、縄文時代から弥生時代へと移行する大きな時代の転換期に生じた、日本列島全体を巻き込んだ現象であることを指摘している（設楽 2018:p.57）。

迫田遺跡の資料は、在地土器の施文にはない削り込みの技法による X 字文が施され、さらに刻目突帯をもち、在地土器と同様の胎土で製作されている点で、在地製作の折衷土器と位置づけられる。弥生文化成立期の東西の相互交流によって生じた全国的な土器動態の中に、指宿地域も含まれていたことを窺わせる点で重要である。市内においては、近年、岩本麓遺跡においても縄文時代晚期から弥生時代前期までの土器がまとまって出土し、これまで不明瞭であった当該時期の様相が少しづつ掴めるようになってきた。今後の資料増加に期待するとともに、今後、九州南部の他遺跡の大洞系土器を含めた検討を進めることが課題である。

## 註

1) 2014 年当時、上村俊雄氏、本田道輝氏、黒川忠弘氏に資料を実見いただきご指導を賜った。

## 参考文献

- 恵島瑛子・鎌田洋昭 2014 『平成 25 年度市内遺跡発掘調査報告書 敷領遺跡・迫田遺跡・松尾城跡』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第 54 集 指宿市教育委員会
- 設楽博己 2018 「南西諸島の大洞系土器とその周辺」『東京大学考古学研究室紀要』第 31 号 pp.47-60 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 考古学研究室
- 設楽博己・小林青樹 2007 「板付 I 式土器成立における亀ヶ岡系土器の関与」『縄文時代から弥生時代へ』新弥生時代の始まり 第 2 卷 pp.66-107 雄山閣
- 藤沼邦彦・関根達人 2008 「亀ヶ岡式土器（亀ヶ岡式系土器群）」『総覧 縄文土器』小林達雄（編）pp.682-693 『総覧 縄文土器』刊行委員会
- 宮地聰一郎 2008 「凸帯文系土器（九州地方）」『総覧 縄文土器』小林達雄（編）pp.806-813 『総覧 縄文土器』刊行委員会